

植物科学 × (インターネット+オンライン) × 次の30年 = ???

立松 圭 (基礎生物学研究所)

インターネットの発達は植物科学や研究に対して大きな影響を与えてきことは、誰もが納得するだろう。私が大学院生だった1990年代後半は、論文といえば冊子体であり、欲しい論文は図書館に行ってコピーしてくるというのが大半だった。現在でも、その頃のコピーした論文を後生大事に保管していたりする。それが、徐々にインターネットが普及するに連れてオンライン配信が増え、雑誌のWebサイトで読みたい論文のPDFを選び、印刷して(ココに世代を感じますね)読んでいたものである。オンライン化される前の論文もWebサイト入手できるようになり、「出版社の労力は大変だったろうに」と思う。そして、今では、冊子体が廃止されて、「オンライン配信のみ」というのが一般的になったわけである。時代の流れというのはすごいと感じる。

情報を得たり、共有したりというのも変わった。昔はインターネットから得られる情報は限られたものであり、学会や研究会に行くほうがホットな情報が得られることが多かった。それが今では、ゲノム情報も研究手法もインターネットを通じて国内外から得られるようになった。研究結果の共有も、昔は、フロッピーディスクやMOディスク(右図)、CD-ROMやHDDに電子データを入れたものを共同研究者に渡していた。それがメールに添付して送ることができるようになり、次世代シーケンスデータや動画などのビックデータはファイル転送やクラウド共有サービスを介してやり取りする。さらには海外とも容易にデータ共有ができるようになった。時代の流れというのはすごいと感じる。



フロッピーディスク(左)とMOディスク(右)。筆者のデスクの中にあつたものを撮影。

そして、2020年、私達はとてつもない黒船来襲を経験し、移動、建物への入構や集会などの制限という「縛り」を受けるようになった。しかし、ここでもインターネットが登場する。オンライン講義やオンライン会議、テレワークによる在宅勤務である。以前と同じ研究活動や教育というわけには行かないし、皆が試行錯誤している。それでも研究は完全に停止しなかったのである。時代の流れというのはすごいと感じる。

これから30年後、きっとインターネットはさらなる進化を遂げて、植物科学をサポートしてくれているだろう。オンラインを活用した研究活動が普通になり、もっと便利になっているのかもしれない。海外との繋がりも今とは違うスタイル、国境や距離を意識しないものになっているのかもしれない(「時差」の壁は超えられないだろうけど)。それでも30年後も変わらないことだけは一つある。研究者自身が「植物を見て」、「手を動かして」、「結果を考えて」、「議論を行って」、「発表を行う」。そうやって今と変わらないループを紡ぎながら研究が進んでいくのである。

そうそう、オンラインでの交流は便利だけど、「対面で会うからこそより深い関係を築いて、議論ができる」こと、「現地に行くからこそ得られる体験がある」ことは忘れてはいけないね。あと、「インターネットに繋がっていないと困る・・・」という未来になるのだけは勘弁してください。